ストリートダンスにおける模倣と独創性

関西学院大学大学院文学研究科研究員
藤田明史

国際オリンピック委員会（IOC）は 2019 年 6 月に、2024 年パリ五輪でブレイクダンスを新種目として追加することに原則合意したと発表した。これにより暫定的ではあるがブレイクダンスがオリンピック競技として採用となった。2020 年 12 月の IOC の会議を経て、正式採用となる予定である。日本において「現代的なリズムのダンス」が中学校の体育に導入され、また国外でもユースオリンピック競技大会では正式種目として実施されるなど、ブレイクダンスを含むストリートダンスは国内外で大きな広がりをみせている。若者を中心とした文化として成長する中で、はたしてストリートダンスの研究はどのような形で進んでいるだろうか。

西欧に目を向けてみると、マーク・アンソニー・ニール(Mark Anthony Neal 1965-)らによって、黒人文化の中で誕生したポピュラーカルチャーとしてのストリートダンスを社会学的側面から考察する研究が行われている[1]。その一方で、国内における研究に関しては、例えば清水らによる認知科学に基づく運動形成に関する研究[2]や、有國によるストリートダンスの日本における社会的価値を考察する研究[3]などが挙げられる。このように、現時点では芸術学的観点からの理論研究はあまり行われていないのが現状である。その原因として、バレエ等と比較して、研究の素地がなく、また、ダンサー自身が研究に無関心であることがあげられる。さらにいえば､ストリートダンスでは競技的側面を持つ｢バトル｣と呼ばれる一時的・即興的なダンスが主として踊られるため作品という概念が希薄であり､作品を記録して残そうということも少ない。

本発表では以上の研究上の問題点から、ストリートダンスにおける模倣と独創性について考察する。あらかじめ決まった踊り方が存在しており、それに倣って踊る点や、既存の曲に合わせて踊る点では、ストリートダンスにはこれまでのダンスと異なる点は見られない。そういう意味ではストリートダンスは模倣するものであるといえよう。では、ストリートダンスにははたして他のダンスと異なる独創性は存在するのだろうか。先述した通り、ストリートダンスが他とダンスと異なる点として、バトルと呼ばれる即興的な競技的側面が挙げられる。そのバトル内でのダンサー同士の対峙にみられるように、ストリートダンスのそれらすべてが決まった踊り方によって構成されているわけではない。相手の型を即興的に模倣する動きが生まれるバトルにこそ、ストリートダンスの独創性が浮かび上がるのではないだろうか。

その独創性を明らかにするために、本発表では、まず、ストリートダンスがこれまで発展した具体的理由を明らかにする。インターネットの普及により、現在、我々は気軽にダンスを見て、踊れることができる。そのため、型の定まったいわば「踊りやすい」ダンスが広く普及した。すなわち、模倣することこそがストリートダンスが発展した理由としてあげられる。

続いて、芸術における模倣とはなにか考える必要があるだろう。美学事典によれば「現像に類似した模像を創り出すこと」を模倣という。この概念は「他の芸術家の作成を模範としてそれと同様のしかたで制作すること、すなわち、対象に倣うこと」を指す場合と「現実の存在者を模してそれと同様のものを制作すること、すなわち対象を写すことを意味する」場合とがある[4]。芸術における模倣の概念を再考することでダンスにおける模倣の視座を広げたい。

最後に、ストリートダンスにおける模倣とは何かを論じる。模倣の問題点は､｢模倣がコピーになってしまうこと」や「模倣に付随した伝達方法が創造の可能性を狭めてしまうこと」が考えられる。これらの問題を、ストリートダンスはバトルという独自の方法で超克してきた。模倣する動きはある定まった型であるが、バトルには相手を打ち負かすために同じ動きを相手より優れた技術で返す場面がよく見られる。このように、ストリートダンスの独創性はバトルの中で即時的に生まれる模倣された型から逸脱した細部にあると言える。

一見すると、ユースカルチャーの中の一時的な流行文化としてとらえられ、研究価値が薄いようにも思われていたストリートダンスだが、実際は現代のダンスの現状を端的に表す事例の一つであると言えよう。

[1] Murray Forman & Mark Anthony Neal, editors “*That's the joint! : the hip-hop studies reader*” Routledge, 2004.

[2] 清水大地・岡田猛「ストリートダンスにおける即興的創造過程」『認知科学』20 巻第 4 号、日本認知科学会、421-438 頁、2013 年。

[3] 有國明弘「ストリートダンスの日本における展開:ダンス必修化をめぐる国内の動向に着目して」『市大社会学』第 15 号、39-59 頁、2018 年。

[4] 竹内敏雄編『美学事典　増補版』弘文堂、174 頁、1974 年。